

同 病理 辻 浩一

小型肺腺癌の核小体形成部位 (AgNORS) を測定した。肺腺癌の核あたりの AgNORS 数の平均は5.6個で、核 DNA 量と正の相関が認められ、aneuploid 例に有意に多く、AgNORS 数の多寡は予後や再発と関連する傾向にあり、AgNORS は新しい悪性度の指標になる可能性が認められた。

21. 非小細胞肺癌における AgNORS の検討

長崎大第1外科 松尾 聡
田川 泰, 吉田一也, 原 信介
川原克信, 綾部公認, 富田正雄
AgNORS は細胞増殖能を反映していると考えられている。今回、非小細胞肺癌の AgNORS の発現と、stage, 予後, 組織型, 核 DNA 量の関連について検討を加えた。

染色は Crocker らの方法に準じて行った。

その結果、AgNORS の発現は高stageほど、低stageでは予後不良であるほど、また組織型では、腺癌より扁平上皮癌で高かった。しかし、核 DNA 量と AgNORS 発現との間には、はっきりとした相関は認められなかった。

22. 同一肺葉内・同時性・多発早期肺癌の2例

熊本地域医療センター呼吸器内科 中村博幸, 柏原光介
深井祐治, 千場 博
同 外科 稲吉 厚
同 病理 蔵野良一

同時性の肺多発癌はしばしば報告されているが、今回我々は同時性・同一肺葉内・多発早期肺癌を2例経験したので報告した。

症例①は左舌区支口の扁平上皮癌と左 S¹⁺²a に小腫瘤(腺癌と

診断)を認め同時性・同一肺葉内・異組織型重複早期肺癌の稀な症例である。症例②は左 S¹⁺²a, S¹⁺²b に2個の腫瘤を認めそれぞれ腺癌と診断された。共に肺野型早期肺癌であり同時性・同一肺葉内・異組織型重複早期肺癌と診断した。

23. 放射線療法を施行した内視鏡的早期肺癌の3例

国療沖縄病院 石川清司
源河圭一郎, 国吉真行
坂東 徹, 久田友治, 宮城 茂
高齢, 多発肺癌, 低肺機能を理由に手術を断念し放射線療法を施行した内視鏡的肺門部早期肺癌3例を呈示する。83歳の男性は、初診より30カ月後に他病死、他の2例の病巣は良くコントロールされている。手術以外の治療手段の組合せが今後必要となる。

24. 術前YAGレーザー治療が行われた肺扁平上皮癌の1例

長崎市立市民病院内科 福田 実, 高谷 洋, 田畑 聡
福田正明, 笹山一夫, 中野正心
同 放射線科 藤本 進
嶋長陽一
長崎大第1外科 綾部公認
富田正雄

症例は61歳、男性。某院に胸部X線右上葉無気肺を指摘され入院。その後右肺の完全無気肺のため当内科紹介された。気管支鏡にて、右主気管支は腫瘤により完全閉塞が見られ、生検では扁平上皮癌と診断された。病期は T3N0M0。ただちにレーザー治療、放射線治療が行われ、またエタノールの局注も併用した。右主気管支の腫瘤は消失、胸部X線も改善。しかし右上葉支口の閉塞所見は残存。その後 CDDP, VDS の化学療法を2サイクル行ったが NC であっ

た。本例は PS 良好のため手術目的にて長大第1外科に紹介。右上葉管状切除術が行われ術後7カ月現在当院外来に通院中である。

25. IV期肺癌の切除症例の検討 佐賀県立病院好生館外科

石田博徳, 古川次男, 米村智弘
吉田猛朗
同 内科 小柳孝太郎
同 病理 宮本祐一

当院の原発性肺癌切除症例211例のうち、IV期肺癌切除症例は18例(8.5%)であった。肺内転移は10例(56%)で、27, 33, 57カ月生存例あり、その他の転移より予後のよい傾向にある。また孤立性脳転移1例(54カ月)、孤立性骨転移1例(31カ月)は2年以上の生存得た。

26. 腫瘍2cm以下の末梢型肺癌切除例の検討

九州大第2外科 横山秀樹
井上 隆, 杉尾賢二, 石田照佳
杉町圭蔵

末梢型肺癌のうち2cm以下のものは17.3%であった。T1およびN0症例の頻度はそれぞれ95.6%, 78.0%であり、2.1cm以上3cm以下の末梢型肺癌と比較しても高かった。しかし、N2症例も14.5%に認められた。2cm以下の群とそれ以上3cm以下の群の5年生存率は74.6%, 50.7%であり、2cm以下では予後が良好であった。しかし、リンパ節転移陽性例に限ると生存率に差はなかった。末梢型小型肺癌といえども進行癌を念頭に置く必要がある。

27. p-T₁N₀M₀肺癌切除後再発例の検討

大分県立病院胸部血管外科
内山貴堯, 山岡憲夫, 谷口英樹
久野 博, 田村和貴
肺癌切除427例中p-T₁N₀M₀例